

第67回 小中高校生の吃音のつどい(Enjoy Music!)

6月21日(日)、小学生11人、中学生2人、高校生10人、兄弟姉妹3人、ご両親24人、スタッフ38人の計88名が参加。杉並区立杉並第十小学校ことばの教室及び音楽室にて開催できました。加納先生ありがとうございました。

僕は今回のつどいでリーダーとしての仕事があったので自分の吃音の事を気にする余裕がありませんでした。普段話す時は吃音の事ばかり考え、心配していて自分のやりたいことに集中できていません。つどいの日は、どうしたらどうしようとかそういう不安はほぼなく、なんとかつどいをやり遂げる事しか考えてなかった為に吃音への不安は蚊帳の外だったのです。どもっても誰も笑わない、不思議そうな顔をしない環境だったのも大きく影響していたと思います。吃音への不安なんか考えられないくらい何か熱中できるものがあればどもることはさほど気にならなくなるんだなという大きなヒントをもらえたような気がします。つどいはみんな楽しそうに会話していて、その場にいるだけで和やかな気持ちになれる雰囲気がありました。次はもっともっと色々な人と関わり、会話してつどいの魅力を存分に味わえたらと思います。また皆さんとお会いできるのを楽しみにしています。(リーダー; 安田稷太、小平市立第2小 鴛淵彰子)

小3女子とお母さん マジック、合唱「素敵な友達」

小6男子 ピアノ「Neckeネック クシコスポスト」

中2女子 ヴァイオリン「Mozartモーツァルト ヴァイオリンコンツェルト5番1楽章」

高1女子 ピアノ「Langeランゲ 花の歌」

高3女子 ピアノ「COSMOS アクアマリン」

スタッフ/高1女子 ピアノ連弾「ホールニューワールド」「美女と野獣」

スタッフ遠藤優 ピアノ「Chopinショパン ノクターンop. 9-2」

スタッフ松本直大 ギター「Reflection」

スタッフ トランペット、尾畑瑞香 ピアノ「You raise me up」

岡野参男 ドラム、尾畑瑞香 ピアノ「Jobimジョビン イパネマの娘」

合唱「カントリー・ロード」(スタッフ トランペット/尾畑瑞香 ピアノ/中2女子 ヴァイオリン)

「世界に一つだけの花」、「雨のちハレルヤ」、「ビリーブ」(川端鈴笑 手話指導、尾畑瑞香 ピアノ伴奏) など

★★ご両親グループ★★★

S.Mさん(小6男子のお母さん)

前回のお料理教室に続いて二度目の参加でした。会場に着いて一番に感じたのは安心感でした。

午前中の部では、息子が演奏させてもらい、ま～最後すべっちゃいましたけど、沢山の拍手をいただきありがとうございました。皆さんの演奏も楽しく聴かせていただき、歌は気持ち良く歌い、あつという間の午前中でした。吃音があると、日常生活で話すことが少ない人もいます。歌では吃らないので、思いっきり歌うことで、ストレス発散できたり、

なんと言っても気持ちが前向きになりますね。

昼食を挟んで、午後は話し合いをしました。大学生リーダー遠藤くんの進行で、子供が吃音の親御さん、吃音当事者の女性の方と同じグループでした。我が子が吃音の方とは共感し合い、リーダーと当事者の方には、体験談などを沢山聞かせていただきました。

「友達に話したらすごく楽になった。一人でも話せる友がいるといい」

「吃音は治したいと思うほど追いかけて来る」

「言葉は治すものではなく越えるもの」

「成功体験は褒めるだけでなく認識させる」

「食べる不安より伝えたい気持ちが強い時、気が付き

たら言えている」

息子に伝えてやりたい言葉ばかりです。息子の吃音は決して軽くはありません。今も出口の見えないトンネルの中で、不安に押し潰されそうになりながらも、何とか頑張っています。不安はありますが、息子の持っている力を信じて、一歩ずつ進んで行きたいと思います。

M.S さん（中3女子のお母さん）

小西和子さん(スタッフ)の経験談は親御さんにとっても良かったと思います。身内に吃音の方が複数いるのに、やはり悩み、隠そうとしたりして過ごしてきたそうです。カミングアウトをしたのは仕事を始めてからのこと。理由は仕事に支障が来て迷惑をかけるから。それからは回りが分かってくれているから楽だったと。

次に娘さんが生まれてその娘さんに吃音があつて、今度は親として悩んだとおっしゃっていました。それからは自分が変わらなければいけないと考え、今までは吃音があつたので前に出ていなかったが、PTA やいろんなことを引き受けて、どんどん前に出て行ったそうです。結局、吃音は逃げたり避けたりは出来ない、すればするほど追いかけてくる。一つ一つ乗り越えるしかない。という言葉がすごく印象深かったです。

A.O さん（中1男子のお母さん）

感想文をとの依頼でしたが、いろいろな思いがあり言葉をまとめることができませんでした。

佐藤さんには、まだお会いしない内から、電話やメールで気にかけて頂きました。

ご紹介頂いた菊地利江さんには、お電話で長々とお話を聞いて頂き、私の心は随分軽くなりました。お電話の中で、菊地さんが、去年参加した群馬での伊藤伸二先生(JSP)の講演で、シンポジストとして話していた方だと気づき驚きました。他にもその時のシンポジストをしていた吉良くんもつどのメンバーである事などを聞き、自分一人でもつどいに行ってみようという気持ちになりました。でもやはり少し心細く思っていた所に、香央莉さんがお電話を下さり、とても心強かったです。

スタッフの若者達も、決して得意ではないであろ

う司会を、子供達の為に頑張っている姿を見て感動しました。彼等は佐藤さんを師に、高校生は彼等を師に、小中学生は高校生を見て学び、力をもっているのだらうと、なんて素晴らしい繋がりなんだろうと思いました。

昼食時にも、優しく迎え入れて下さった保護者の方々、子供が吃音になったのは親のせいではないと言って下さった養護学校の先生など。つどいに関わる皆さんに本当に感謝しています。

息子はまだ吃音を受容する生き方にはなれずにいます。今回少し強引に誘ってしまい、逆に意固地になってしまいました。少し時間は掛かるかもしれませんが、いつか彼が助けを求めた時に、こんな素晴らしい場があると知っているだけで、少し安心していられます。今後は、つかえなくて良かったね、ではなく、吃音は悪い事じゃないのだから、どもつても良いんだよ、と伝えていきたいと思います。言葉まとまりませんが、以上です。ありがとうございました。

♣♣中学生グループ KJ 法を使って♣♣

Y.T さん(中1女子)

今回はヴァイオリンを弾かせていただき、緊張しましたが、とても楽しかったです。スタッフの方々、聴いて下さった方々、そして事前にリハーサルまでして下さった尾畑さん、本当にありがとうございました。皆さんの演奏は堂々としていて素敵で、引き込まれました。

午後の中学生グループは、たった 2 人でしたが、あっという間に時間になって名残惜しい程でした。「吃音って何？」というテーマでしたが、私が思いつかないようなことがたくさん出てきて、いつもとても楽しみです。いつもつどいでは吃音のも変なことではないという温かい雰囲気があって、家のように安心できる場所です。また参加したいと思いますので、宜しくお願いします。

徳永^{なるわ} 成和（スタッフ）

「吃音って何？」というテーマは非常に幅が広く、自由な発想で意見を書けるので、その分個人の発想の違いが大きく反映されると思います。例えば私

の場合は、吃音の症状や対処法ばかりに重点をおいて書いてしまい、周囲の理解や吃音を持つことがもたらす他者との出会いなどはその場では思いつかず、それについては言及できませんでした。しかし、他の皆さんは意見としてそのような事まで書き表し、その点が吃音について考える上で必要不可欠だと感じました。私の場合、普段日常生活においてある程度、吃音を理解してくれる人もいて、近頃の活動で吃音を持つ何人もの人と出会ったはずなのに、そのような事を意見を書く場で思いつかなかったことが心に引っかかり反省点でもありました。

最後に「**吃音さんへの手紙**」を書いて読み合いましたが、これは面白い企画だと思いました。自分の中に深く入り込んでいる吃音と距離をおいて吃音と向かい合うような視点となり、普段とは変わった感覚となったことが印象に残りました。

午前の合唱では予想以上に皆の声がよく出ていて、思い切って歌うことができました。今までは歌うことがそれほど好きではなかったのですが、その楽しさが初めて分かったような気がしました。

川端 ^{すずえ} 鈴笑(スタッフ)

午前の音楽の時間では、元気一杯に歌ったり美しいピアノやヴァイオリンの音色を聴いて、とてもリラックスできて緊張がほぐれたので良かったです。そして、初参加にも関わらず、私は「ビリーブ」の手話付けの担当として選んでもらい、みんなの前で歌ったり手話をしたりと今まで一人ではやろうとは思わなかったことに対して背中を押してもらう形で挑戦できて、なおかつ楽器を演奏していた小学生の女子から「手話がすごく良かった」と最後に言ってもらえたのがとてもうれしかったです。集いが終わった時は、満足感で胸が一杯でした。機会があればまたやりたいと思っています。今度その時が来たら、台などの上に立って皆の見やすいように工夫してみようと思いました。

午後の部では、**中学生グループ**を担当。参加人数は、二名と他のグループと比べると少なかったですが、その分深く話せたと思い、私も吃音についてじっくり考えるいい機会になったと思います。参加者2名とスタッフ5名合わせて40個くらいの吃音

についての感想が出てきて中学生達もたくさん意見を出していたり、その意見を積極的にグループニングしていたりして、充実していたと思います。

最後に、「**吃音さんへの手紙**」を書きました。私は、吃音というものを持っていると気付いたのがまだまだ日が浅くあまり深くは書けなかったのですが、他の人達は手紙からはみ出すくらい文字数を書いていて、「どもること」にちゃんと向き合っているんだと感心してしまいました。次回同じように手紙を吃音さんに送る機会があれば、私も深い内容が書きたいと思いました。

今回、このようなことを経験することが出来て自分がとても成長できたと思います。吃音を持って生まれたことで辛い経験も沢山しましたが、こんな素敵な出会いがあったことや達成感を得られたので吃っていても自分を出しながら生きていくのも有りなのかなと自信が持てました。11月の演劇のつどいでも、頑張りたいと思います。

KJ 法 テーマ「吃音って何？」

テーマに沿い自由に意見を書いていきました。そして、内容の近いものをグループ別にまとめ、模造紙に配置。以下に紹介します(紙面制約上、全てではありません)。

担当 徳永成和

個性:「吃音は自分自身」「僕自身」「その人の特性」「心」

積極的:「吃音があるから話さない方がいいとか仕事ができないなんてことはない」「吃音なんかで悩んでいられない」「意外と気にされていないことも多いもの」「無理に上手に話そうとしない」「吃っても最後まで言い切る」「逃げちゃだめ」「どもっても自分を責めない」

つどい(得なこと):「出会いをもたらすもの」「吃音があるとつどいに来ることができる」「吃音がなければ出会えなかった」「知り合いが増える」

吃音に向かって(ポジティブ):「(自分次第で)チャームポイントになり得るもの」「歌うことが好き」「作文が得意(しゃべるのが上手じゃない分)」「今の自分に影響を及ぼす」「自分の中での落とし所を見つけしていくもの」「活かしたい」「バネ」

感情(ネガティブ):「あまりに言葉が出ないと相手が

吃音を知っても少し悔しくなる」「もどかしい時もある」「自分をよく知ることができる」「改善したいけど改善しない」

不便なもの：「発表の時困る」「音読が苦手」「大勢の前で話すのが苦手」「道に迷った時に人に話しかけられない」「ちょっとした会話をやりづらくさせるもの」

周囲の理解：「周りに吃音を知っている人がいると心強い」「知り合ったりした人には最初に説明した方が楽」「知らない人が多い」「友達、先生にどう話せば良いか悩む」「相手にとっての第一印象」「分かってくれる人がいるとうれしい」

場面：「一人になるとすらすら話せる」「周囲の状況に左右される」

人によって：「言いにくい言葉は人によって違う」「人によって出方が違う」「特に自分の名前は言いにくい」「個人差の大きいもの」

時間：「話すと必ず出る訳ではない」「なんとかなる時とそうではない時があるもの」

人生：「人生の方向を変える」「試練のようなもの」「今後の人生を大きく左右する」

有名どころ：「英国王のスピーチ(2010年イギリス映画。実在の吃音の英国王ジョージ6世)」「青い鳥(重松清による小説。吃音を持つ村内先生が各話に登場)」「風子のいる店(『寄生獣』の作者でもある岩明均による漫画。ウェイトレスが吃音の女子高生)」「金閣寺(三島由紀夫の小説。吃音を持つ僧の心情をよく表している)」「志乃ちゃん(自分の名前が言えない(押見修造による漫画。吃音の女子高生の主人公)」「キャットストリート(神尾葉子による漫画、ドラマ)」「田中角栄(第64, 65代総理大臣で吃音)」「小倉智昭(吃音のアナウンサー)」

「吃音さんへの手紙」

A.Yさん(中1)「吃音さんへ あなたがいて、発表に困ったりするけど、楽しいつどいに行かせてくれたり、吃音つながりの友達を作ってくれてありがとう。けど何より、どういう時に吃音が出るのか、ひどいのか、ハッキリ教えてほしいです」

Y.Tさん(中2)「吃音さんへ つらいものも楽しいものもくれるパートナーです。ずっと一緒でしたが、

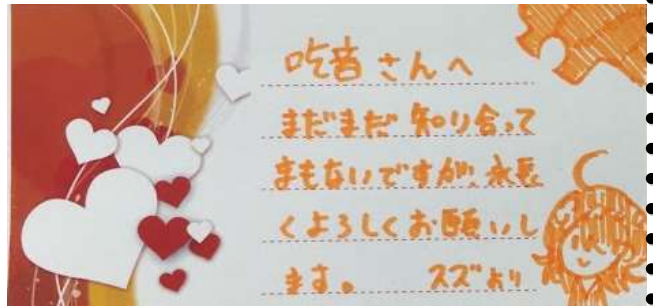
これからもよろしくお願いします」

小口貴宏(スタッフ)「吃音さんへ いつもご苦労さま。必要以上に出しゃべってくるおかげで、日々苦労してるけど、まあお茶でも飲んで、たまには休んでくださいな」

松本直大(スタッフ)「吃音に関して僕が知っているのは吃音はわからないということで、僕の人生の中では吃音のことについて色々考えたり、話したりすることが大切だと思いました」



徳永成和(スタッフ)「吃音さんへ あなたは1%の人間に何かしらの影響を与えています。しかし憎んでも仕方ありません。運命だと思って自分らしい生き方を探していきます」



♣♣高校生グループ♣♣

M.Wさん(高1女子)

スタッフの吉良さんが『空手部の部長をやっていた』という話が心に響きました。私は、一番偉い『委員長』や『部長』などをやったことがなかったから、吉良さんを見習って、自分に自信を持ち、高校で挑戦してみよう！！と思いました！

岡野さん(スタッフ)が『家庭内のキツオンについて。両親の接し方について』お話をしてくれました。私が吃ってしまっても、家族は何も言わず、言葉が出てくるまで待っていてくれます。キツオンで悩んだ時話を聞いてくれます。私が、何かにチャレンジしようとした時応援してくれます。私のキツオンを理解してくれる家族に対して、感謝の気持ちを忘れず、そして、安心して、キツオンという相棒と付き合っていこうと思いました。

私は、ことばの教室やつどいという存在があったからこそ、何事も諦めることなく、挑戦することが増えてきました！これからも、つどいに参加し、少しでも、キツオンさんと上手く付き合いたいです！

根本 征幸(弘前大学 教育学部特別支援専攻4年)

前回のお料理教室に引き続き、2回目の参加ということもあり、多くのスタッフや参加者が「こんにちは」と挨拶してくださり“つどい”の一員としていられるんだと感じることができました。

音楽ということもあってか、私自身とても楽しみにしていました。みんなで歌を歌ったり演奏を聴いたりしてきっと素晴らしい時間になる。そのように感じていたからです。思っていた通りで、「**勇気 100%**」「**ようかい第一体操**」「**世界に一つだけの花**」や「**カントリーロード**」などの誰もが知っている歌を歌うことで一気に会場が一つになるようなそんな感覚がしました。小学生の子供達が生懸命声を出している姿を見てやっぱり歌っていいなと思いました。ピアノやヴァイオリン、ギター、トランペットの演奏もレベルが高く皆さんの演奏に聞き入ってしまったものです。ぜひこれからも楽しく続けて欲しいと思います。

午後は**高校生グループ**に参加し、高校生3人、スタッフ3人で話し合いを行いました。3人ともとても个性的で近況などを話してくれました。全員高校1年生だったので「**カミングアウト**」が共通の話題として出てきました。やはり初対面の人とのやり取りだと緊張したりして吃りがひどくなる。吃音をみんなに言った方がいいのか、もっと打ち解けるには、など様々な悩みがあるようです。今回私が聞いてみたかったことのひとつとして、“つどい”に参加しようと決めた理由を話してもらいました。その中で「**つどいに来るとしばらく吃りがひどくなる、だけどまた来たくなる、来てしまう**」と語ってくれたことがとても印象的でした。私としては非常に興味深く、私が思っていた以上に“つどい”の存在は大きいかもしれません。また来たくなる理由はおそらくたくさんあると思うのですが、一つは「**楽しい場所**」であること、もう一つは、「**安心できる場所**」であることだと考えます。スタッフ一人一人がとても明るく、一生懸命話す姿を見て「ここにいていいんだ」と思えるのか

もしれません。

青森にいと津軽弁が飛び交っています。私の友人が「**津軽弁話せば気持ちいい、気持ちも伝えられるし、素の自分なんだよな**」って言っていたのを思い出しました。少し似ているのかもしれませんが。非常に興味深い内容を聞かせていただきました。

今回のつどいも私自身がとても楽しむことができました。みなさんと少しずつ信頼関係ができる中で、参加してくれる方の変化や成長などが見ることができたら非常にうれしく思います。次回のサマーキャンプもぜひ参加したいと思いますのでよろしくお願ひします。

収支報告

項目	収入	支出
参加費(59家族)	¥35,400	
発送費		¥16,314
料理教室写真プリント代		¥4,270
切手代		¥174
勉強会資料印刷代		¥320
当日資料印刷代		¥670
合計	¥35,400	¥21,574
残金(次回つどいに繰り越し)	¥13,826	

・参加費は一家族600円で、スタッフも一人600円払っています。

・残金 13826 円は、次回サマーキャンプや11月演劇レッスン講師料に回させていただきます。

会計 本田拓也

後記

◆つどいに来るとよりどころになること。頭では、どもらたくない…と思っても、**からだ**の方が、実はどもらたい…と叫んでいるのではないのでしょうか。普段の生活には様々なストレスがあるので、が、頭がそれにSTOPをかけている。コントロールせよと。これが下手に続くと、からだがかんぱ起こし壊れてしまうかもしれません。からだの声にそっと耳を傾けることです。方言と同じで、どもらって話す方が楽。つどいでは、どもらがひどくなるというより、押さえつける必要が無い(とても楽…でいい)ということ。しかし、また生活に戻ると…、実はどもらないように…戻っちゃいます。

♣カントリーロード 小学生時代、合唱経験あるスタッフ
が今回提案。ジブリ映画「耳をすませば」と全く同じよう
に、ヴァイオリン伴奏も入れ、合唱できたのは、格別の喜
び。（代表 佐藤隆治）